

機関番号：12613

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21830039

研究課題名（和文） 自傷行為の現状と本質を明らかにするための実証研究

研究課題名（英文） Research on the condition and the nature of Self-Injury

研究代表者

戸高 七菜 (TODAKA NANA)

一橋大学・大学院社会学研究科・特任講師

研究者番号：40547569

研究成果の概要（和文）：

自傷行為経験者へのインタビュー調査により、行為者は二つの目的をもって自傷行為を行うことがわかった。自傷行為の第一の目的は不快気分の解消である。自傷行為によって、現実感が喪失しているように感じられる離人感や抑鬱感などを、軽減するために行うものである。二つ目の目的は、他者との関係に変化を起こすことである。自傷行為の原因についてはまだ明らかになっていないが、幼少期にトラウマ体験に遭遇している場合が多い。

研究成果の概要（英文）：

In this research, I had the interviews with the persons who have experienced the Self-injury. I found that Self-injury has two purposes. The first purpose is to reduce unpleasant feelings. They can reduce the depersonalization and the depression feeling.

The second purpose is to cause the change into the relation to others. The factor and the mechanism of Self-injury are still not clear. But some Self-injury persons had traumatic stress in childhood.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,070,000	321,000	1,391,000
2010年度	950,000	285,000	1,235,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,020,000	606,000	2,626,000

研究分野：自傷行為・若者文化研究

科研費の分科・細目：教育社会学

キーワード：自己アイデンティティ、自傷行為、リストカット、スクールカウンセラー、コミュニケーション、嗜癖

1. 研究開始当初の背景

(1) 自傷行為についての研究は、主に心理学や精神医学の分野で積み上げられてきた(たとえば、川谷大治編 2004 など)。

近年、自傷行為は子ども・若者の間で深刻な広がりを見せており、中学生の 8.9% (男子 8.3%, 女子 9.0%)、女子高校生の 14.3%、大

学生の 3.3% (男子 3.1%, 女子 3.5%) という高い割合でカッティングがみられたと報告されている(松本・山口 2006, 山口 2007)。

ほとんどの先行研究では、自傷行為は個人の心理的な問題と受け止められてきた。しかし、現代社会に生きる子どもたちがこれだけの割合で自傷行為を行っているのだとすれ

ば、自傷行為は、個人的な病理ではなく、子どもたちがしばしば「生き辛さ」という言葉で訴える現代社会に育つことの困難が表出されたひとつの形として捉えられるべきであろう。

(2) 先行研究を概観すると、自傷行為には、自分の意識や感情を変化させることと、他者の態度や行動をコントロールすることという、二つの機能があると指摘されている(たとえば、西園 1983: 柏田 1988: ウォルシュ & ローゼン 1988=2005: 天野 2004 など)。

しかし、この二つの機能のどちらが行為主体に強く意識されるかは、時間とともに段階的に移り変わることについては、あまり注目されてこなかったように思われる。

本研究では、自傷行為が行なわれる「行為」段階と、自傷行為を行ったことを他者に語り/提示する「顕示」段階を分析的に区別することによって、それぞれの段階における自傷行為の機能を分析した。

少数の例外はあっても、ほとんどの自傷行為は1人きりのときに行われるので、「行為」段階における自傷行為の第一の目的は、自分の意識や感情を変化させることと言えるだろう。それに対して、自傷行為で他者の態度や行動をコントロールしようとするのが意識されるのは、コントロールしたい他者に自傷行為を「顕示」する段階になってからである。

(3) 自傷行為によって他者との関係に変化を起こすという意図をもって自傷行為を行い、さらにその事実を他者に語ることは、我が国の自傷行為研究では60年代の終わりから既に注目されていた。

どちらかという、自傷行為による不快気分の解消よりも、他者との関係への影響の方に臨床家も研究者も関心が向きがちだったようである。

手首自傷をボーダーラインパーソナリティ障害の行動化(アクティングアウト)と位置付け、好ましくないものとして捉える見方が中心的であった。

精神科医の松本俊彦は、そのような我が国の自傷行為研究に対して、自傷行為による不快気分の解消という側面を強調して異議を唱えた。松本が積極的に紹介してきたように、欧米での研究では、不快気分の解消こそが自傷行為の第一の目的であると言われるようになってきている。

しかし、一部の自傷行為者が他者との関係に変化を起こすために自傷行為を行うことも事実であることは、松本も認めるところである。

2. 研究の目的

本研究では、自傷行為を手がかりとして、子ども・若者が訴える「生き辛さ」の具体的な内実を社会的に明らかにすることを目指した。

自傷行為という形で現れている困難は、現代社会のどのような特質がどのように影響して生じてきたものなのだろうか。

本研究では、平成17年から行われている予備調査を通じて、①自傷行為によって不快な気分を解消できること、②一部の自傷行為経験者は、他者との関係を変化させるためにも自傷行為を行うこと、という二つの仮説を立て、これを検証するために自傷行為経験者にインタビュー調査を行った。

3. 研究の方法

まず、自傷行為を行う本人にとって自傷行為はどのような目的で行われるのかを調べるために、自傷行為経験者にたいしてインタビュー調査を行った。

平成21年度は、予備調査を行ってきた調査対象者からのフィードバックを受け取りながらその成果を発表していくことができた。

予備調査を行った自傷行為経験者は次の6名である。Aさん、19歳女性、首都圏在住。Bさん、19歳女性、地方在住。Cさん、22歳女性、首都圏在住。Dさん、22歳女性、地方在住。Eさん、37歳男性、首都圏在住。Fさん、38歳女性、首都圏在住。

Aさんには21年6月に、Cさんには21年12月に対面インタビューを行うことができた。

Fさんには21年11月に電話インタビュー、21年12月にパソコン通信を利用したスカイプインタビューを行うことができた。

BさんとDさんには、対面インタビューと電話インタビュー・スカイプインタビューを組み合わせてインタビューを繰り返し行うことができた。

Dさんには平成18年から、他の5名は平成17年から継続してインタビュー調査を続けている。

22年度は新規のインタビュー対象者として、3名の自傷行為経験者と、地方の公立高校で学校相談援助を担当する教員に対面インタビューを行うことができた。

新たに話を聴くことが出来た自傷行為経験者は、首都圏在住の19歳の女性が2名、首都圏在住の40代の女性1名である。

4. 研究成果

(1) インタビュー調査を行った自傷行為経験者の全員が、自傷行為によって不快な気分を解消させたことがあると語った。

解消しようとされる不快な気分には、希死念慮や抑うつ、不安、自己嫌悪、離人感など、

経験者ごとに異なっている。また、同じ行為者であっても、自傷行為によって解消が目指される不快な気分は変化する。

ある時は抑うつを解消するために自傷行為を行い、またある時には離人感を解消するために自傷行為を行うなど、同じ行為者であっても自傷行為の目的は変化する。

自傷行為によって解消された不快な気分が異なると、自傷行為が異なる意味を持つものとして語られる。

例えば、離人感が解消された場合には「生きている実感を感じるため」、不安が解消された場合には「不安で居ても立ってもいられなかったが、切ったら落ち着いた」など、表現の仕方、本人の意味付けの仕方にはさまざまな場合がある。

しかし、自分にとって不快な気分を解消するという点は共通している。22年度に話を聞いた19歳の女性は、「自傷行為は気分転換である。他の人たちはカラオケに行くが、自分はその代わりに自傷行為を行うことで気分転換をしている。」と語った。

(2) 不快な気分を自傷行為によって解消出来ることを経験的に知っている行為者は、自傷行為による精神的な緊張状態の解決をしばしば衝動強迫的に行う。

自傷行為によって不快な気分を解消するというやり方で、さまざまな不快な出来事をやり過ごすという問題対処パターンを身につけてしまうのである。

ある行為や物質によって不快な気分を解消できると学習し、問題が起きたときに不快な気分を解消してくれる特定の行為や物質を利用したいという衝動に支配され、自己をコントロール出来なくなるのは、アルコールをはじめとした嗜癖の特徴である。

インタビューを行った自傷行為経験者は、全員が自傷行為によって不快な気分を解消できると語っており、さらに、自傷行為を行いたいという衝動をコントロールすることが難しいと述べている。その意味で、自傷行為もまた嗜癖であると言えるだろう。

(3) 不快気分の解消を目的とした自傷行為にはさまざまなバリエーションが見られた。

「リストカット」と表現される自傷行為が一番多かったが、手首の内側を刃物などで傷つける場合だけでなく、前腕部の内側と外側、二の腕の内側と外側、手の甲などを刃物などで傷つける行為まで「リストカット」と呼ばれる場合があった。

「リストカット」以外には、頭の毛を抜く、血が出るまで爪を噛む、手指を噛む、瀉血(注射針などで血を抜く)、壁に頭を打ちつける、かさぶたをはがすなどがあった。

なお、妻子のある男性との性的関係への依

存など、社会的文脈に照らして自傷的な性質があるのではないかと疑わせるエピソードが2ケース見られたが、本人がそれを自傷行為とみなしていない場合には自傷行為であると判断することは避けた。

(4) 不快な気分を解消するという目的をすべての自傷行為経験者が語ったのに対して、自傷行為によって他者との関係に変化を起こすために自傷行為を行うという調査対象者は少なかった。

例としては、「私は典型的なボーダーラインパーソナリティ障害だと思う。構ってほしいからリストカットをしたことがある」(40代女性)という語りがあった。

この調査対象者には、自傷行為を他者との関係の中で用いることが、「ボーダーラインパーソナリティ障害」という医療カテゴリーの特徴として捉えられていた。

問題なのは、「ボーダーラインパーソナリティ障害」という医療カテゴリーが、非常にネガティブなイメージと共に語られてきた歴史があるという点である。

他者との関係の中で、変化を起こすために自傷行為を行うことが、好ましくない、時には非難されるべき行為とみなされてきた歴史があるために、そのような目的があって自傷行為を行ったとしても、それを当人が容易に認めることが出来ないのではないかと考えられるのである。

自傷行為を行うことで他者との関係に変化を起こそうとする場合、当人にとっては他に選択肢がないのだということを、自傷行為経験者と関わる際には意識する必要があるだろう。

(5) 自傷行為の背景として、幼少期の深刻なトラウマ体験が語られた。

幼少期の性的虐待、児童養護施設による保護(父母との分離)、性犯罪被害、家族のアルコールとそれをきっかけとする家庭内不和などである。

身体的虐待については、通常から体罰があっても本人は「しつけ」として捉えている場合もあれば、虐待として捉えている場合もあった。

学校体験としては、いじめられ体験は非常に多く、ほぼ全例に学校生活の中で何らかの集団的な嫌がらせの被害があった。不登校体験・保健室登校体験があるケースも多かった。学校が非常に緊張の高い場所である。

先行研究でも、性的虐待と自傷行為の相関は非常に高いと言われている。身体への攻撃が自傷行為という形で影響を残すことを物語るものであろう。

(6) 注意欠陥多動性障害(ADHD)との相関

を示唆する先行研究があるため、複数の診断基準を参考に ADHD の傾向があるかどうかをインタビューした。使用した診断基準は、DSM-IVTR のもの、ハロウエル&レイティのもの、ユタ大学のものである。

ADHD は児童期に観察され、思春期以降は症状が落ち着いていくという傾向がある。そのためか、確実に ADHD であると断定できるケースはなかった。

(7) 改めて結論を述べると、自傷行為の第一の目的は不快な気分を解消することである。一部の自傷行為経験者は、他者との関係に変化を起こすために自傷行為を行うこともある。不快気分の解消の方法としてなぜ自傷行為を選ぶのかについてはまだ分からないが、幼少期に何らかのトラウマ体験に遭遇している場合がしばしば見受けられる。

本研究で話を聞くことが出来た自傷行為経験者は少数であり、この研究で得られた知見が一般化出来るかどうかについては疑問が残る。この研究を生かした質問紙を作成し、一定の規模のあるサンプルを対象として質問紙調査などを行って更に自傷行為の実態について解明していくことが望まれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

①戸高七菜、コミュニケーションの序列化と消費社会化——「リア充」「非リア」というネットスラングを手がかりに——、日本教育保健学会年報、査読有、18 巻、2011、3-13

[学会発表] (計 1 件)

①戸高七菜、日本教育保健学会、セクシュアリティと関係性についての語り分析——後期近代における自己がもたらす不安についての一考察——、2010 年 3 月 28 日、びわこ成蹊スポーツ大学 (滋賀県)

[図書] (計 2 件)

①藤田和也・田中孝彦・教育科学研究会、大月書店、『現実と向き合う教育学——教師という仕事を考える 25 章』2010、269 (38-45)

②久富善之、山崎鎮親、長谷川裕、他、旬報社、『図説 教育の論点』、2010、239 (114-117、122-125)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

戸高 七菜 (TODAKA NANA)

一橋大学・大学院社会学研究科・特任講師

研究者番号：40547569